

CINEX Web Journal



第8号

発行日 2021 年 12 月 1 日

★ 異文化視点からの日本人の国民性

大橋 由紀子

★ 異文化に触れ、他者を知る経験：PBL という実践的学習をめぐる覚書

関根 正敏

★ 先駆者に学び、歴史に学ぶ

～2021 年 9 月コロナ禍の日本とフランスにて～

安藤 博文

異文化視点からの日本人の国民性

ヤマザキ動物看護大学 大橋由紀子

異文化コミュニケーション関連の授業は毎年多くの学生の興味を集める。異文化に興味を持つ学生が増えることは喜ばしい。なぜなら、異文化に触れることは人間性を形成することにも繋がると考えるからだ。

数年前とても衝撃的なことが起きた。ある学生のご家族が駅で突然脳梗塞の発作で倒れたが、救急車手配や駅員への報告をする人はおらず、道行く人々に放置された結果、現在も意識が戻らないままだという。なぜ誰一人助けようとしなかったのか、私は憤りすら感じたが、学生の話によると、「夜遅く、酔っ払いだと勘違いされたのかもしれない。駅員がようやくみつけ、救急車で運ばれた時にはもう既に手遅れの状態でした。」とのことだ。多くの人々が挙げる日本人の国民性は「親切」ではなかっただろうか。

この話を聞く数か月前、私はマレーシアから帰国したばかりだった。マレーシアの多文化社会で特に実感したのは、家族や社会、身の回りにいる人にとっても優しく、目が合うと笑顔をみせ合うという国民性だった。困っている人は同国民でも他国民でも積極的に声をかけをし、助け合う。他人が車いすでの移動を手助けしたり、偶然レストランで隣に居合わせた他人に気軽に話しかけたり等、日本ではあまり見かけない状況に多く遭遇し、本当の意味で「温かく優しい」国民性に触れたと感じた。

外国人の日本人に対する印象は肯定的なものが多く、日本人は「規律、秩序を尊重し、礼儀正しく優しい」等の意見を考慮すると、道德教育において学習指導要領が定める「国際社会の平和と発展に貢献する日本人を育成」という観点は叶えられていると考えられる。しかし、私は個人的に「優しくて親切」な気質はいつでも発揮されるわけではないように思う。秩序を尊重しすぎるあまり、「トラブルやもめ事には巻き込まれたくない」「他人とはなるべく関わらない」という気質も無意識に育っている気がしてならない。

受験戦争、出世競争を経験し、「本音と建前」を使い分けて生き抜いた経験が「心の豊かさ」から遠ざかり、「他人と相容れずに過ごす」習慣を形成した要因となったのかもしれない。

人種を超えた多くの人々とのコミュニケーションから多様な考えを学び、個人の固定観念に自由度をもたせることで、今後誰かを助けられる行動がとれる若者が増えることを願う。その観点から、異文化教育は道德教育に組み込まれるに値すると私は考える。

異文化に触れ、他者を知る経験：PBL という実践的学習をめぐる覚書

中央大学 関根正敏

大学教育という学びの場をキャンパスに閉じるのではなく、地域社会をフィールドとし、学生の能動的活動を重視した学習が注目を集める中で、本稿では、PBL（Project-Based Learning：プロジェクト学習）という形態の学習に着目し、異文化交流という視点からその意義や課題に関して考察します。PBLとは、社会に存在する複雑な課題を解決していく過程の中で、様々な能力を育成する学習のことです。知識伝達型の講義とは異なり、プロジェクトを通じて課題発見や仮説設計、仲間との協働的な活動といった実践的なスキルを身につけることを目指します。スポーツ経営が専門の筆者は、地域密着型のスポーツクラブと連携し、ホームタウンが抱える社会課題の解決に資するプロジェクトを展開する PBL 型の授業を指導しています。

異文化交流という視点からみると、PBL の起点となる「課題探索」という営みは、他者理解という点で興味深いフェーズになります。学生たちに求められるのは、対象地域で「他者」とコミュニケーションを図り、解決すべきイシューを探索することです。フィールドで出会う他者とは、多くの場合、学生たちにとって馴染みのない土地で、異なる文化的な文脈のなかで暮らす人たちで、いわば「異文化」をまとった人たちだといえます（日本語という共通言語を話す場合でも、地域の文化性は存在します）。そうした他者から信頼を獲得し、協働したい相手だと認められ、社会調査の言葉でいえばラポールを形成することが PBL の初期段階では大切になります。

こうした他者理解のためのスキルを習得する点に PBL の大きな価値があると思いますが、そこでの学習にはある程度長めの期間を確保し、じっくりと現地での活動を進めることが必要です。筆者が担当する授業でも、例えば中山間地域を対象としてプロジェクトを展開することがありますが、授業の期間内で学生たちが現地の方々の実情を理解するにはかなりの苦労が伴っています。大学教育をめぐるのは、例えばクォーター制など「短期集中型」の学習過程を重視する動きがある中で、見逃してはいけないのは、一つのフィールドに深く長く関与し、他者理解へと向かう PBL 等の演習が存在することです。そうしたフィールド志向の学習も充実させ、変化に富んだ現代社会を生き抜く力を涵養する高等教育が一層進展することを願います。

先駆者に学び、歴史に学ぶ ～2021年9月コロナ禍の日本とフランスにて～

静岡大学 安藤博文

2021年9月、緊急事態宣言により担当している大学の講義がすべてオンラインとなった。それを機に、4日間で出発を決め、フランスに飛んだ。12時間をかけて到着したパリでは、ある程度の解放感が感じられた。人が密集する閉じられた空間ではマスクの着用が義務だが、屋外では外してもよい、とメリハリが付けられていた。また、「衛生パス pass sanitaire」の活用により、経済・社会的活動の再開が実現した。これは、ワクチンを2回以上受けている者、またはPCR検査や簡易的な抗原検査を受けて陰性だった者にQRコード付きの証明書が与えられるものである。このQRコードを飲食店、劇場や映画館、長距離列車などを利用する際に入り口で提示しスキャンしてもらうことで、入場が許可される。私の滞在中は厳格に守られていた。また、仮設のコロナ検査場が市内あちこちに設けられ、検査体制が徹底していた。簡易抗原検査を受けるとわずか15分でQRコードが発行された。



パリ市内の簡易検査場



パリ市内のレストランにて

オンライン授業、研究のデータ収集や友人との再会をしながら2週間のフランス滞在を終え、いよいよ日本への帰国となったら大変である。フランス出国前に日本国の定めるPCR検査を受け、定められた様式に記入してもらうのだが、この陰性証明に1日半を要する。羽田に到着すると、まず問診、もう一度PCR検査、アプリの設定がなされてから入国となる。その後は14日間の自主隔離で、アプリの位置情報によって見張られる毎日を過ごした。

さて、数か月遅れてワクチン接種が始まり、効果が出てきた日本でも、徐々に行動制限緩和がもくろまれており、「ワクチン・検査パッケージ」の導入、「GoTo トラベル」の再開などが議論されている。この際にやはり「先駆者」である外国の事情を見ながら研究する必要も感じられる。確かにフランスと日本では制度、文化的背景、国民性など、異なる点が多い。しかし、フランスをはじめとしたいくつかの国々は、日本が数か月後に通る道筋を示しているように思われるのである。「我が国独自の」という点にこだわらず、その成功した部分や失敗した部分を客観的に研究し、私たちの生活に生かしていくような施策がとられてもよいのではないかと考える。人の往来がない中での情報収集、伝達は大変難しいが、異文化を意識し学び、情報を共有する視点を忘れずに持ちたいところである。

最後に、パリ歴史博物館で見つけた 1848 年コレラ流行のワクチン接種に対するポスターの画像を見てみよう。貧民に対しても例外なく配慮しながら、パリ市が厳格に感染対策を行っていたのである。歴史は繰り返す。

